

アルタイ型言語におけるモダリティの意味領域地図について
—「ナル」表現の文法化にも注目して—

**On the semantic map of modality in Altaic-type languages:
with special focus on the grammaticalization of “naru” expressions**

風間 伸次郎

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

KAZAMA Shinjro

Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

はじめに

1. 先行研究

- 1.1. モダリティの意味領域地図に関する先行研究
- 1.2 「ナル」相当動詞の文法化に関する先行研究
- 1.3. モダリティと否定との関連に関する先行研究

2. 本稿が仮定する意味領域地図

3. 検証

- 3.1. 本稿の対象言語におけるモダリティの意味領域地図
- 3.2. 本稿が対象とする各言語に関する補足
 - 3.2.1. トルコ語
 - 3.2.2. モンゴル語
 - 3.2.3. 日本語（方言にも注目して）
- 3.3. 「ナル」相当動詞単独でのモダリティの意味

4. 分析

- 4.1. 本稿で提案した意味領域地図の妥当性について
- 4.2. 本稿で扱った言語における「モダリティ」の範囲について：モダリティとは何か
- 4.3. 本稿で扱った言語における「ナル」相当動詞の使用範囲について
- 4.4. 本稿で扱った言語におけるモダリティと否定との関連について

おわりに

キーワード：モダリティ、意味領域地図、「ナル」相当動詞、文法化、アルタイ型言語

Keywords: modality, semantic map, “naru” expressions, grammaticalization, Altaic-type language



本稿の著作権は著者が所持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

要旨

本稿を通じて提示した結論は下記のとおりである。

①次のようなモダリティの意味領域地図を提案し、本稿が対象としたアルタイ型言語におけるその妥当性を検証する。



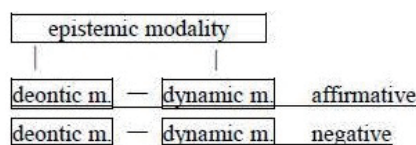
②拘束的・動的モダリティと認識的モダリティはトルコ語や朝鮮語では同じ形式が用いられ、連続しているといえるが、モンゴル語やナナイ語、日本語では連続していない。拘束的・動的モダリティの形式は、日本語では動詞複合体において屈折形式の前に現れる。このことからこうした言語では義務や可能はモダリティの範囲に入らないものと考ええる。このような言語は他にも多く存在する可能性がある。

③「ナル」相当動詞のモダリティへの文法化はモンゴル語（6つ）や朝鮮語（5つ）に多く観察され、日本語（2つ）はこれらの言語に比べると相対的に少なく、トルコ語とナナイ語には観察されない。

Abstract

The conclusions presented throughout this paper are as follows.

1. The following semantic domain map of modality is proposed, and its validity in the Altaic-type languages targeted in this paper (Turkic, Mongolian, Nanai, Korean and Japanese) is verified.



2. Deontic and dynamic modality and epistemic modality use the same form in Turkic and Korean, and can be said to be continuous, but not in Mongolian, Nanai, nor Japanese. The forms of deontic and dynamic modality appear before inflectional forms in the template of verbal complex in Japanese. This leads me to believe that ‘obligation’ and ‘ability’ do not fall within the scope of modality in these languages. It is possible that there are many other such languages.

3. The grammaticalization of “naru” verbs into modalities is more common in Mongolian (6) and Korean (5), relatively less in Japanese (2) than in these languages, and absent in Turkish and Nanai.

はじめに

本稿ではアルタイ型言語におけるモダリティの意味領域地図を提案することを目的とする。なお「アルタイ型言語」は亀井・河野・千野 (1996:28-29, 499) による類型的な概念であり、主要部後置 (Head final) の語順特性を持ち、連辞的 (paradigmatic) な言語であるとされているが、その概念はまだ十分に確定されたものとはなっていない (風間 2014, 風間 2020 も参照されたい)。本稿ではアルタイ型言語の中でも、いわゆるアルタイ諸言語 (チュルク諸語・モンゴル諸語・ツングース諸語の言語) と朝鮮語、日本語を対象とする。チュルク諸語からはトルコ語、モンゴル諸語からはハルハ・モンゴル語 (以下では単に「モンゴル語」とする)、ツングース諸語からはナナイ語をその代表として取り上げることとする。さらにこれらの言語のそれぞれにおけるモダリティの意味領域地図を対照することにより、次の 2 点についても解明を目指す。

- [1] 「モダリティ」の定義やその範囲については、研究者の間で相違がある。その相違点の中でも重要なものの一つは拘束的 (deontic) モダリティと動的 (dynamic) モダリティ、すなわち「義務」と「可能」をモダリティに含めるか否かという問題であると思われる。本稿はこの点について、「義務と可能がモダリティに含まれるか否かという点については、言語によって異なっていることが多い」、という仮説を提案する。
- [2] 「日本語やアジアのいくつかの言語は「ナル」型言語である」とする見方がある。本稿ではその見方について、モダリティの面から検討する。

1. 先行研究

ここではモダリティの意味領域地図、「ナル」相当動詞 (後述) の文法化、モダリティと否定との関連、の 3 つの観点からの先行研究をそれぞれ取り上げていく。

1. 1. モダリティの意味領域地図に関する先行研究

Auwers and Plungian (1998: 111) では最終的に次のようなモダリティの意味領域地図を提案している。

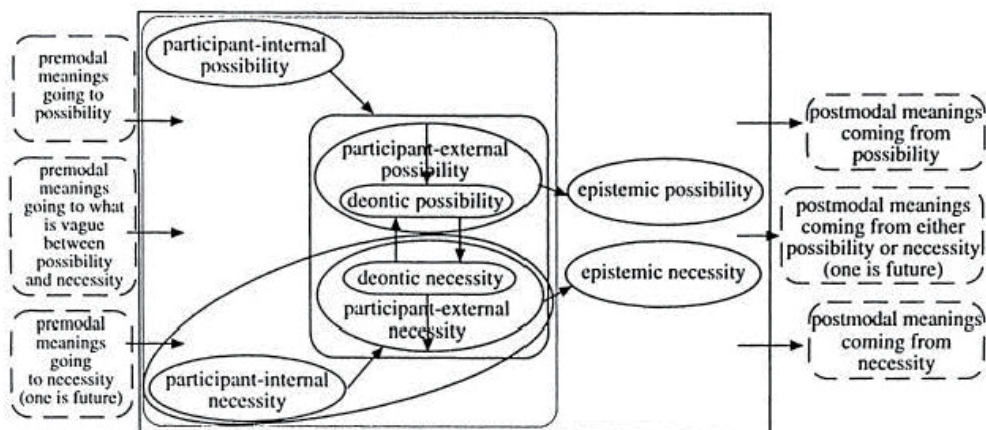


Figure 19. *Modality's semantic map*

図1: モダリティの意味領域地図 (Auwers and Plungian (1998: 111) による)

参加者の内的能力 (participant-internal possibility) や参加者の願望 (participant-internal necessity) が、拘束的 (deontic) モダリティにおける参加者外的可能性 (すなわち許可／状況可能) および参加者外的必要性 (すなわち義務) を経由して認識的可能性・認識的必要性 (推量や確信) へと近づいていく関係になっている様子を捉えているといえるだろう。

Auwera and Plungian (1998: 82) ではモダリティを次のようにタイプ分けしている。

表1: モダリティの諸タイプ

Table 1. *Modality types*

Possibility			
Non-epistemic possibility			Epistemic possibility (Uncertainty)
Participant-internal possibility (Dynamic possibility, Ability, Capacity)	Participant-external possibility		
	(Non-deontic possibility)	Deontic possibility (Permission)	
Participant-internal necessity (Need)	(Non-deontic necessity)	Deontic necessity (Obligation)	Epistemic necessity (Probability)
	Participant-external necessity		
Non-epistemic necessity			
Necessity			

(Auwera and Plungian (1998: 82) による)

ただ Auwera and Plungian (1998) がデータとして用いているのはそのほとんどがヨーロッパの印欧語族の言語によるものであり、上記の意味領域地図やタイプ分けが本稿の対象諸言語にも十分に当てはまるかどうかはなお明らかではないと筆者は考える。

日本語のモダリティを研究した Narrog (2009: 15) では、下位分類されたモダリティの相互関係を下記のような図に整理している。

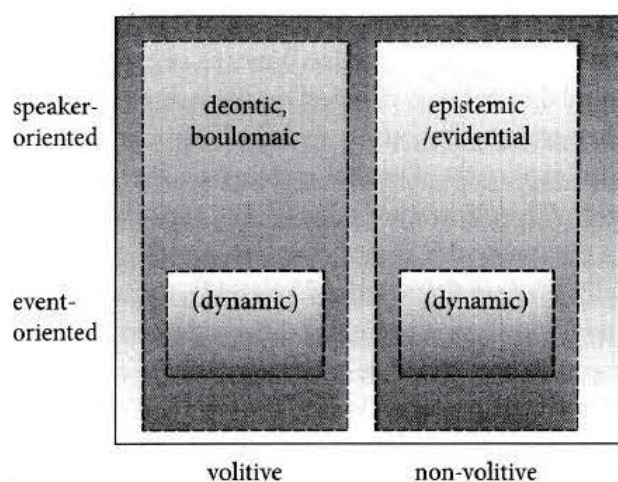


Figure 1. Dimensions of modality and subcategories

図2: モダリティとその下位範疇の次元 (Narrog (2009: 15) による)

ここでも動的 (Dynamic) モダリティが仲介となって拘束的・欲求的モダリティ (deontic, bouloomatic) と認識的モダリティ (epistemic/evidential) に続く、という図式になっている。

Narrog (2009) も欧米の印欧語族の言語、例えば英語における may - may be, will - can, must - should のような法の助動詞における意味の実現を基礎に下位のモダリティ間の関係を考えている。

1. 2. 「ナル」相当動詞の文法化に関する先行研究

Anderson (2006: 359) では下記のような文法化の図式を提案している。

- change-of-state schema → grow, become
- i. be[come] > copula, expletive/dummy auxiliary
 - ii. be[come] > probabilitive
 - iii. be[come] > possibilitive
 - iv. be[come] > capabilitive
 - v. be > progressive (often + LOC)
 - vi. grow > inchoative

このうち本稿で問題になるのは ii, iii, iv である。Anderson (2006: 360-361) は ii. be[come] > probabilitive についてはトゥバ語の -gan **boor** iyin、ハカス語の -če/-ken **polar**、トファ語の PRS **bol-** という形式を挙げ、iii. be[come] > possibilitive についてはトファ語の -p **bol-** を、iv. be[come] > capabilitive についてはトゥバ語の -p **bol-** という形式を例に挙げている (ハカス語、トファ語、トゥバ語は 3 言語とも、チュルク諸語の言語であり、太字部分が「なる」の意の動詞の語幹である、なお太字は筆者による)。

守屋 (2018: 34) は「ナル」の意を持つ動詞 (守屋 (2018) では「ナル」相当動詞と呼んでいる、本稿もこれに倣う) の使用や守屋 (2018) でいうところの「ナル」的表現の使用を言語間で対照している。なお下記表中のヤはヤクート語 (本稿ではサハ語)、土はトルコ語、シはシンハラ語を指している。

表2 (守屋 2018: 34 による)

	日	韓	蒙	ヤ	土	シ
1. ○春になった>×春が来た	○	×	×	×	×	×
2. ○富士山が見える>(私は) 富士山を見る	○	○	○	○	○	○
3. ○なぜいるの?>何が運ぶの? △両方	○	○	○	○	△	○
4. ○飲めば良くなる>×薬が良くする	○	○	○	×	×	○
5. ○(私は) 財布を盗まれた>△私の財布が盗まれた/誰かが(私の) 財布を盗んだ	○	×	△	△	△	×
① ○ここはどこ?>×私はどこ? △両方	○	○	○	×	○	△
② ○誰もいない>×私以外誰もいない	○	○	○	×	○	○
③ ○いま、行く>×いま、来る	○	○	○	○	×	×
④ ○泣けるマスカラわかる>×わからない	○	○	×	○	×	×

ここでは他動性の低い述語の格枠組み (2) や無生物主語他動詞文 (3, 4)、持ち主の受身 (5)、場所の名詞的性格 (①)、疑問代名詞と全部否定 (②)、ダイクシス (③)、関係節的でない連

体修飾の可否 (④) などのさまざまな問題が、(どれも日本語にあるからという理由で) 「ナル」的表現」として一緒に扱われている。対象言語の語族や系統、地理的分布や接触などについては全く考慮に入られていない。ちなみに無生物主語他動詞文や、場所の名詞的性格、関係節的でない連体修飾などの問題は、それぞれ類型的にどのようなタイプの言語においてどのような理由で生じやすいのか、ということが実証的に研究されつつある (風間 2016, 風間 2019, Comrie 1998, 益岡他 (編) 2014 など)。

守屋他 (2017a) および守屋 (2017b) では「ナル」相当動詞の用法について言語間の対照を行っている。守屋 (2018: 35) にその結果を整理した表があるのでこれを下記に引用する。このうちの 5. と 6. では本稿で扱うモダリティの機能における「ナル」相当動詞の文法化の用法も取り扱っている。日本語の「ナル表現」を基準に調査項目を選定しており、この点に問題があるという点については守屋 (2017b) 自身も言及している。

表3 (守屋 2018: 35 による)

	日	韓	蒙	ヤ	土	シ
1. 春になった>春が来た	○	×	×	×	×	×
2. 変化は帰着点をとる。×ゼロ格または主格をとる	○	×	×	×	×	×
3. コトの変化の用法がある。: ex. 春に /0 になる	○	○	○	○	○	○
4. モノの変化の用法がある。: ex. 氷が水に /0 になる	○	○	○	○	○	○
5. ～しなくてはならない: 義務・不可避の意味用法がある。	○	○	○	×	○	○
6. ～してもナル: 実現可能・不可避の意味用法がある。	×	○	○	×	○	×
7. 出現→存在を意味する用法がある。△古典語のみ (日)	△	×	○	○	○	○
8. 誕生を意味する用法がある。△古典語のみ (日)	△	×	○	○	○	○

残念ながら守屋の一連の研究は、「ナル (的) 表現」が「日本語の母語話者が事態を主観的に把握し、動作主と動作を不可分のまま言語化したもの」であるという「認知言語学」的な先入観に捉われていて、対象としたユーラシア言語間における差異も「価値観の相違」や「風土の相違を背景に、表現の好みに相違がみられる」といったきわめて非科学的な結論へと分析されている。

「なる」の意味の動詞の形式をみると、チュルク諸語のそれとモンゴル諸語のそれでは機能のみならず形式までもがきわめてよく似ていることが目を引く。この点に関しても先行研究をみておく。これについて最初に指摘したのは Poppe (1960: 99) であるようだ。Poppe (1960) はチュルク諸語のそれとモンゴル諸語のその類似は、アルタイ同系説に基づく同語源の語とみているようである。

mo. *bol-* ‘werden’ 「なる」 (筆者註), kalm. *bol-* id. mngr. *ōli-* id. =AT *bol-* (= *bōl-*) ‘werden’, jak- *buol-* < **bōl-* id.

(mo. はハルハ・モンゴル語、kalm. はカルムイク語 (モンゴル諸語)、mngr. はモンゴル語 (モンゴル諸語)、AT は古チュルク語、jak. はヤクート語/サハ語である)

Poppe (1960: 99) は *o, *õ の対応例として上記の例を示している。サハ語では、「もとの長母音は、長母音のままか二重母音によって現れる」(庄垣内 (1992: 546)) のだが、同じく祖語の長母音を保持しているとされるトルクメン語 (林 (1989: 1380)) においては長母音ではなく、bol- である。bol- が、もし秘史モンゴル語などにみられる bui などと何らかの関連を持つならば、モンゴルの方が古く、モンゴル諸語の方からチュルク諸語の方に入ったものであるとみる可能性も考えられる。しかし、借用とみた場合、モンゴル諸語からチュルク諸語に入ったのか、もしくはその逆か、その方向を決めるのは難しいように思われる。

1. 3. モダリティと否定との関連に関する先行研究

本稿で扱うモダリティの諸形式は、肯定か否定かによって補充法による形をとることが少なくない (すなわち肯否による非対称性を示す)。江畑 (2015: 5-6) では諸先行研究における否定のモダリティとの関わりについての指摘を紹介しているが、これを下記に引用する。

Bybee(1985: 176)は、否定がムードとの近接性(“its affinity to other mood meanings”)を有することを指摘している。(中略) Palmer (2001: 52) は否定と認識モダリティとの関連を論じており、さらに Quirk et al. (1985: 83-84) および Palmer (2001: 173) では、否定が疑問と共に非現実 (irrealis) として扱われるケースを挙げている。

2. 本稿が仮定する意味領域地図

本稿では先行研究を参考に、次のような意味領域地図を提案する。

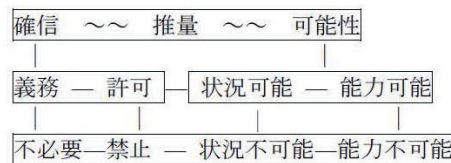


図3: 本稿の提案するモダリティの意味領域地図I

これは次のような意味特性等に基づいて配置したものである。認識的モダリティの内部は拘束的モダリティと動的モダリティとの対応を考慮し、左から右へと話者の確信度が弱まる形で配置してある。

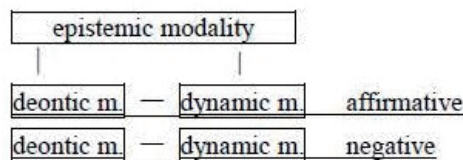


図4: 本稿の提案するモダリティの意味領域地図Iの配置基準

ただしこの意味領域地図は現時点で提案し、本稿で検証するものである。今後分析が深まればよりふさわしい形に配置等を修正していく可能性がある。

3. 検証

3.1. 本稿の対象言語におけるモダリティの意味領域地図

以下では本稿の対象とする言語におけるモダリティ形式の現れを観察し、実際に隣接する意味領域が同一形式でカバーされるケースがあるかどうかを観察する。もし隣接する意味領域が同一形式でカバーされていれば、それはこの意味領域地図が妥当であることを示していると判断する。さらに、合わせて「ナル」相当動詞の出現分布、否定における非対称性もみる。他にも注意すべき特徴が観察されればそれを指摘する。

以下では次のように表を用いて各言語のモダリティ形式を示す。まず日本語の例を示す（筆者¹⁾の内省による）。同じ形式が隣接して分布するものは表罫線を太線にして示した。「ナル」相当動詞は太字にし、非対称性を示す否定形式には下線を付した。- は接辞境界、= は附属語境界、# は複合語境界を示す。

なお義務の否定が禁止であるのか不必要であるのか、許可の否定が禁止であるのか不必要であるのか、という点についてはさらに検討が必要であると考えている。

表4: 表形式による意味領域地図の表示

確信	推量		可能性
義務	許可	状況可能	能力可能
禁止	不必要	状況不可能	能力不可能

表5: 日本語

ATTR=ni tigaina-i	ATTR=daroo		ATTR=ka=mo sir-e-na-i
-(a)nakereba narana-i	-(i)te=mo ii	-(r)e-	-(r)e-
-(a)nakya			
-(i)te=wa narana-i	-(i)na-kute=mo ii	-(r)e-na-	-(r)e-na-
-(i)tya dame			

『語学研究所論集』第16号の特集には同じ例文を用いて聞き出しによって得られたモダリティ諸形式のデータがある（アンケート例文の番号は【確信】[15]、【推量】[16]、【可能性】[18]、【義務】[3]、【許可】[1]、【禁止】[2]、【状況可能】[14]、【能力可能】[13]である）。これに基づいて下記の表を作成した。すなわち、トルコ語は菅原(2011)、モンゴル語はジンガン(2011)、ナーナイ語は風間(2011)、朝鮮語は伊藤(2011)による。ただし「不必要」は上記の調査例文になかったため、今回コンサルタント²⁾に伺ったり先行研究の記述を見るなどしてデータを補った。なおVは動詞、PTCPは形動詞、-PSは人称接辞、-TMはテンス標識を示し、大文字は母音調和による異形態のあることを示す。翻字や各形態素の機能については原典を参照されたい。

1) 筆者は1965年東京生まれの日本語母語話者である。

2) ナーナイ語のコンサルタントは1937年ハバロフスク州ナイヒン村生まれ、モンゴル語の話者は1989年オヴルハンガイ生まれの話者の方である。

トルコ語 (チュルク諸語)

-mAll-ps	-(y)Abil-ir		-(y)AcAk
-mAll-ps	-(y)Abil-ir-sin(iz)	-(y)Abil-ir-ps -Ir	-(y)Abil-ir-ps -Ir
-mA-mAll-ps -mA(-yIn) -(y)AmA-TM-ps	-mA-yAbil-	-(y)AmA- 	-(y)AmA- -Il-mAz -mek mümkün değil

モンゴル語 (モンゴル諸語)

-gaa n' lavtaj PTCP-AAs garčaa=güj PTCP yostoj	-x bajxaa		-ž (č) magadgüj
-x=güi bol bol -o-x=güj -x xeregtej	-ž bol (-no)	-ž bol (-dog) (-ž čad-)	-ž čad-dag
-ž bol -ox=güj (süü) büü / bitgii V	-x=güi baj-san č' bol -no	-ž bol -dog=güj	-ž čad-dag=güj

ナーナイ語 (ツングース諸語)

-gIIA- PTCP bi-žərəə	PTCP bi-žərəə		PTCP bi-žərəə
-i=mAt aja	-mi aja / -i=dAA aja	-mi mutə-	-mi mutə-
-mi ača-asi ə-ji V-(r)A	-Asi=dAA aja	-mi mutə-əsi(n)-	-mi mutə-əsi(n)-

朝鮮語

-(u)l kes i-ta -(u)m=i hwaksil#hata -(u)m=i thulli-m eps-ta	-ul kes i-ta		-(u)l swu iss-
-ya ha- / -ya tway- -ci anh-umyen an=tway-	-A=to tway-	-(u)l swu iss-	-(u)l swu iss- -(u)l cwul al- VN=ka tway-
-(u)myen an=tway- -ci mal-	-ci anh-a=to tway-	-ci mos-V-keyss-ta -ci mos-ha-keyss-ta -(u)l swu=ka eps-ta	-ci mos-V-keyss-ta -ci mos-ha-keyss-ta -(u)l swu=ka eps-ta -(u)l cwul molu-ta

3. 2. 本稿が対象とした各言語のモダリティ意味領域地図についての検討

3. 2. 1. トルコ語

林 (2013: 227, 231) には次のような記述がある。

-(y)abilは、「～するかもしれない」という意味の表現としても使われる。ただし、この場合、中立形か未来形の接尾辞が後ろに続くのが普通だ。

可能形の場合と同じく、olの義務形olmalıは、名詞述語や動詞述語（主に、動詞の完了形、現在形、未来形）の後ろに付いて「～のはずだ」、「～にちがいない」という意味を表す。

3. 2. 2. モンゴル語

岡田・向井 (2006) では次のように記述されている。

許可の表現は、前の項で見た禁止の表現の平叙文の形である次の文末形式によって作られます。

【語幹-ž】 bolno.

Či odoo xar’ž bolno. 君はもう帰っても構いません。

Manajd dollaraar toocoo xijž bolno. うちでは米貨で支払いをしてもかまいません。

モンゴル語の可能・不可能の表現の特徴は、個人の能力など一般的な場合・状況が許すかどうかによる場合・時間的に完遂できるかどうかによる場合の3つを形のうえで区別することです。

3種類の可能・不可能の表現はいずれも、以下のような補助動詞形式によって表されます。つまり、3つの補助動詞の違いがそれぞれのニュアンスを表現し分けるというわけです。

自分の能力など一般的な場合

【語幹-ž】 čad-

状況が許すかどうかによる場合

【語幹-ž】 bol-

時間的に完遂できるかどうかによる場合

【語幹-ž】 amž-

(中略)

これまでの例ですでに気付かれたことと思いますが、モンゴル語では、状況が許すかどうかによる可能の表現と以前に学習した許可の表現とは連続しています。

許可の表現に関して、日本語や朝鮮語のようにとりたての要素を加えるとどうなるかコンサルタントに訊いてみた。下記の例文において、太字の **ch’** が日本語の「も」によく似た機能を示すとりたての小辞である。

Či odoo xar’ž **ch’** bolno. 君はもう帰っても構いません。

Manajd dollaraar toocoo xijž **ch’** bolno. うちでは米貨で支払いをしてもかまいません。

上記のような文では、ch'が入ってもよいが、入ると「帰ってもよいが、帰らなくてもよい」「米貨で支払いをしてもよいが、それ以外の方法でもよい」のようなニュアンス、すなわち、選択が可能だというようなニュアンスが生じるという。

3. 2. 3. 日本語（方言にも注目して）

渋谷 (2006: 67-89) には本稿の意味領域地図に関連するきわめて重要な指摘がいくつかなされている。これを以下に要約する（なお例文番号は原典のままとした）。

共通語は東京の体系をベースにしており、能力可能と状況可能を形式的に区別しないが、全国的にはそれを区別する地域も多い。[能力可能-状況可能]の順に示せば、[キレネ-キラエネ]（青森）、[ヨーキン-キラレン]（大阪）、[キキラン-キラレン]（福岡）、[キーエン-キラレン]（長崎）、[チーユーサン-チララン]（沖縄本島）などがそれである。

能力可能と状況可能の非対等性

次に、能力可能と状況可能の二つについても、各地の方言の状況を見渡してみると、これが対等に存在しているとはいえないところがある。意味の面では能力可能形式の表すところが有標で、能力可能（と心情可能・内的条件可能）の意味を限定的に担うことが多いのに対して、状況可能形式は、状況可能のみならず、その他の可能の意味をも一般的に表し、汎用されるケースが多い。

英語の 'can' の用法を分類するときには、ability・root possibility・permission の三つにわけることが多い。英語では、それだけ permission の用法が確立していることが伺える。

一方、日本語の可能形式も、次のように、さまざまな行為指示を表すものとして使用されることがある。

- (149) (店で食事していて) 漬け物苦手なんだけど、食べられる? (依頼)
- (150) どなたでもお入りになれます (許可)
- (151) ここは駐車できません (不許可)
- (152) 食べられません (不許可、乾燥剤の注意書きなど)

以下、本項では、可能形式が不許可を表す場合について、(1)意味化の度合いと、(2)変化の動機との2点からまとめてみよう。

(1) 不許可の意味化の度合い

日本語の可能形式が担う不許可の意味は、方言によって、語用論的な意味の段階にとどまっているか、それとも意味論的な意味にまで変化しているかに違いが観察されるようである。

① 語用論的な意味の段階。たとえば共通語などでは、不許可の意味は、

- (153) きみは会員じゃないからここには入れないよ。僕には止める権限はないから別に入るなどはいわないけど

のように、キャンセル可能な語用論的なものととどまっている。

② 意味論的な意味の段階(1): 可能形式と不許可形式が同一形式の場合。一方、山形市方言などでは、子どもをしつけるのに、母親が、

- (154) そんなことサンネ (できない) / ヤンネ (言えない) からね

といった可能形式を用いることが多く、行為指示表現の一類型として十分に確立している。同一形式が可能と不許可の両者を表すものとして多義化している例である。

なお、可能形式が許可・不許可を表すというとき、その可能形式の表す可能の意味は状況可能である。能力可能と状況可能に異なった形式を使用する方言がいずれかを不許可表現として採用する場合には、状況可能形式を採用することが多い(秋田方言など、秋田方言研究者日高水穂氏談)。

③意味論的意味の段階(2):可能形式と不許可形式が別の形式の場合。四国方言では、さらに、能力可能・状況可能・不許可の三つの意味が、

(155) 英語の文章なんて、ヨ一読マン(能力可能)

(156) 忙しくて新聞なんか全然読メン(状況可能)

(157) ごはんを食べながら新聞は読マレンヨ(不許可)

のように、副詞ヨ一・可能動詞・助動詞(ラ)レルで分担されているケースが多い(例は愛媛県新居浜方言)。こういった地域では、不許可の意味はもはや形式に焼きつけられた意味であり、キャンセルすることはできない。

(2) 変化する動機:丁寧さ

もともと状況可能を表した形式が許可や不許可を表すようになるための動機は、やはり丁寧さということにあると思われる。許可や不許可といった発話行為は、話し手の社会的な立場が聞き手のそれよりも上にある場合になされるものであるが、そういった場合でも、聞き手に対して丁寧にふるまうことは必要である。とりわけ、不許可という行為は、聞き手の、「自分の意向を認めてほしい」というポジティブ・フェースと、「指示されたくない」というネガティブ・フェースの両方のフェースを同時につぶす行為であるために、聞き手のフェースが損なわれるのを避ける戦略が必要であり、このことが、話し手に行為指示の権利(オーソリティ)があることを明示しない、不許可という含意をいつでもキャンセルできる可能形式を採用させているのである。共通語については、

(158) タバコは吸えません

(159) 芝生には入れません

など、公共の場での掲示にこういった可能形式が使用されることが多いが、それにはこの丁寧さということが要因としてある。

なお、日本語の可能形式は、行為指示的に用いられる場合、英語の‘can’などとは異なって不許可(否定文)を表す場合が多く、それにくらべて許可(肯定文)や依頼(疑問文)を表すことはそれほど多くはない(#は語用論的に不適切であることを表す)。

(160) a. きみもいっしょには{#来られる/来ていい}よ(許可)

b. You can come with us.

(161) a. *すみません。どうか塩とれますか(依頼)

b. Can you pass me the salt, please?

許可は聞き手の要求を認めるという点で聞き手のポジティブ・フェースを立てる行為であり、依頼も、聞き手のネガティブ・フェースはつぶすがその行為遂行能力を認めているという点でポジティブ・フェースを立てる行為である。

したがって、聞き手のフェースへの脅威度ということでは不許可>依頼>許可といった階層が想定されるが、日本語では、主に、この階層の最上位にある、聞き手との関係をもっとも脅かしそうな不許可という行為を行う場合に可能形式が採用されるということであろう。

認識のモダリティ形式への変化

次に、可能形式から認識的なモダリティ（に近い意味を表す）形式への変化は、日本語の場合、以下のような可能形式に観察される。

①現代語の補助動詞ウル。もともと可能文が作れない無意志動詞のアルや起コルなどに付加した場合にもっとも典型的に出来事の生起可能性を表すが(162)、意志動詞の場合でも生起可能性を表す（生起可能性と可能のあいだで二義的である）ことがある(163)。

(162) そういうこともありうる／起こりうる

(163) 救助隊はそのような場合、いつでも出動しうる

（≡出動する可能性がある（生起可能性）・出動できる（可能））

②現代語のカネナイ。もともと可能の意味を表したカネルの否定形カネナイは、事態生起の可能性にかかわる話し手の判断を表す。

(164) 太郎ならそんなこともやりかねない

しかし、いずれの形式も文体的に限られており、しかも、

(165) そういうこともありうる{かもしれない／だろう}

(166) 太郎ならそんなこともやりかねない{かもしれない／だろう}

のように、さらに判断のモダリティ形式が後接するなど、コト的な性格が強い（英語の、①に相当する意味を表す‘can’の文も、状況可能とともにroot possibilityとして位置づけられるのがふつうである。

(167) (Expert advising archaeologist) This can be the jaw bone of a dinosaur.

（（専門家が考古学者に）これは恐竜の顎骨である可能性がある））。

日本の方言では一般に、そもそも、共通語ほどには認識的な（epistemicな）モダリティ形式が分化していないということがあり得るようと思われるが、可能形式が認識的なモダリティを表すものになる変化は、日本語全体を考えても、それほど顕著に見出されることではない。Bybee et al. (1994: 181) は、能力可能を含むagent-oriented modalityは、（一般に認識的なモダリティを担う形式である）屈折接辞によって表されることはほとんどないと述べているが、日本語の可能形式も、可能動詞を構成する -eru と助動詞（ラ）レルが比較的融合度・抽象度が高いほかは、動詞の連用形に付加する補助動詞（ウル・キル・オーセルなど）や、「{～ガ／スルコトガ} {カナフ／ナル／デキル}」などの語彙的・分析的な形式、副詞などの語彙的な形式ばかりである。また、このうちの動詞類の形式は、命令形以外の多くの活用形を備えている（不変化詞ではない）。その他、構文的にも、（実現可能の場合）可能形式はアスペクト形式のテイルに先行する（書ケテイルなど）など、命題寄りの位置を占めるといったこともあり、日本語においては、可能形式は、認識のモダリティを表すものにはなりきれないのかもしれない。

松田 (2009: 99) では、日本語の方言の中でも鹿児島方言では、「ナル」を（能力・状況）可能に用いることが指摘されている。

九州方言の中でも鹿児島方言では、共通語と同じように意味の下位区分（区別）がなく、例えば「読んがなっ／読んがならん（読むことができる／読むことができない）」という言い方で、すべての場合の「読むことが可能／不可能」であることを表します。

なお日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）(2001: 303) には、「ナル」が「できる。することができる。」の意を持つ方言として、薩摩、茨城県稲敷郡、新潟県、

三重県志摩郡、滋賀県彦根、滋賀県神埼群、大阪府泉北郡、島根県出雲市、愛媛県、鹿児島県、種子島、口永良部島、喜界島、沖縄県首里もあがっている。

3. 3. 「ナル」相当動詞単独でのモダリティの意味

ここでは他の動詞や述語に後続して文法化したものではなく、「ナル」相当動詞が単独で話者による善悪の「モダリティ」的判断に使われるかどうかを確認する。

トルコ語の *olmak* 「なる」には、*ol-ur!* (中立形)「よろしい」、*ol-maz!* (中立形の否定形)「だめだ」のような用法がある (竹内 (1989: 289))。

モンゴル語の *bol-o-x* には、*bolž bolž!* / *bolž dee!* (< *bol-žee* (伝聞等の) 過去形)「よかった、やった、正しい」、*bolo-o-x n' ter.*「それでよい、それで結構」のような用法がある (田中 (2005: 45, 47))。「だめ (だ)」という意味は *bol-* によっては直接は表現できないようで、小沢 (1983: 647) によれば「だめな」のモンゴル語訳には *demij*「いたずらに (な)、やたらに (な)、勝手気ままに (な)」、*bütexgüj*「実現困難な、悪い、不適切な」、*taaraxgüj* (*taar-a-x*「一致する、気に入る、なじむ」)、*xereggüj*「必要でない、入用でない、役に立たぬ、徒に」があがっている (各語の語釈も小沢 (1983: 154, 79, 351, 520) による)。

ナーナイ語の *osi-*「なる」には管見の限り単独で「モダリティ」的判断を示す用法はない。Onenko (1980: 315-316) にもそのような記述は全く見当たらない。

朝鮮語の *twi-da*「なる」には、*tway-yo.*「よろしいです」、*an-tway.*「だめだ」のような用法がある (菅野他 (編) (1989: 251))。

(諸方言を含む) 日本語でははっきりした単独用法の例を得られなかった。日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (編) (2001: 302-304) の「なる」の項には「望んでいたことが実現する。思いがかなう」の用法が、「ならない」の項には「(多く、条件の「て (は)」を受けて) 禁止の意を表す。いけない。」「(打消の意の条件句を受けて) 義務や当然の意を表す(…しないと) いけない。…のはずだ。」の用法の説明があるが、単独用法の用例は見当たらない。

4. 分析

4. 1. 本稿で提案した意味領域地図の妥当性について

ここでは本稿で提案した意味領域地図のうち、まず [義務 - 許可 - 状況可能 - 能力可能] の連続性について、諸言語での状況を確認する。

まず、義務と許可の連続は朝鮮語とナーナイ語にみられるが、完全に同じ形ではなく、それぞれの言語で *tway-*「なる」(朝鮮語)、*aja*「よい」(ナーナイ語) に先行する [副動詞 + とりたて] の形が義務と許可とは異なっている。

次に、許可と状況可能の連続はトルコ語とモンゴル語の他、日本語の諸方言でもみられる。トルコ語の形式は *bil-*「知る」の文法化したものであるなので、能力可能から表の左の方向へ向かってその機能を拡張してきたものと考えられる。渋谷 (2006) は、許可と同一形式であるのは一般的に状況可能であるとしているが、トルコ語で能力可能までが同一形式なのはこの推定を裏付けるものだと考える。

状況可能と能力可能の連続は日本語、トルコ語、ナーナイ語、朝鮮語に観察されるが、両者

が連続していることは、ある意味で自明のことなのかもしれない。

以上の状況からみて、[義務 - 許可 - 状況可能 - 能力可能] の配置は、少なくとも本稿の対象言語の範囲内では支持できるものとする。

4. 2. 本稿で扱った言語における「モダリティ」の範囲について：モダリティとは何か

次に拘束的・動的モダリティと認識的モダリティとの連続性について考える。日本語では 3 人称が主語である述語の事態を推量するのに、「明日は雨が降らなければならない」「もうそろそろあの人が着かなければならない」や「明日は雨が降れる」「もうそろそろあの人が着ける」などと言うことができない。したがって拘束的・動的モダリティと認識的モダリティは連続していない。

同じようにモンゴル語とナナイ語ではこの両者に連続は見られない。しかしトルコ語と朝鮮語には連続が見られる。朝鮮語では可能の形式 *-(u)l swu iss-* の方だけが確信と推量にも用いられる。一方、トルコ語では義務の *-mAll-ps* も可能の *-(y)Abil-ir-ps* もそれぞれ確信と推量に用いられる。義務と確信の連続は同じチュルク諸語のうちの少なくともウズベク語（チャガタイ語群）、トゥバ語（シベリア語群）、チュヴァシュ語（ボルガル語群）といった系統的に別の下位グループに属する言語でも観察される³⁾ので、チュルク諸語では一般的であることがわかる（ただしその構成要素はさまざまに異なっている）。

上記の状況から、拘束的・動的モダリティと認識的モダリティの連続した配置に関しても本稿の意味領域地図は支持される。

次に上記の連続の問題に関連させて、(通言語的な)「モダリティ」の範囲についても若干の考察を加えたい。ここではまず渋谷 (2006) も取り上げていた屈折形式との位置関係の観点から考察する。日本語において、義務と可能はさらにその後ろに屈折形式を後続させることが可能であり、したがって過去形にすることができる（行かなきゃならなかった、行けた）。つまり動詞複合体にあって屈折の前に位置する。許可は一見過去にすることができそうにもみえるが（行ってもよい>行ってもよかった、行ってもいい> *? 行ってもよかった）、許可の意味ではなくってしまい、音形も異なってしまう。

これに対しトルコ語の義務の形式 *-mAll-* はテンス形式と範列的に対立する屈折形式であり、可能の *-(y)Abil-* は許可・可能・推量のいずれの意味の場合も恒常的状态を意味するアオリスト形式 *-Ir* をとるようだ。アオリスト形式 *-Ir* だけでも可能を示すことができるという。アオリスト形式 *-Ir* は屈折形式である。

モンゴル語における義務 *-x=güi bol bol-o-x=güj*、許可 *-ž bol(-no)*、状況可能 *-ž bol(-dog)* の形式において、屈折形式がどの程度必須であるのかについては今後調査を進めて行きたいと考えている。ナナイ語と朝鮮語についても同様である。

まず拘束的モダリティや動的モダリティがはたしてモダリティであるのか否かについては、言語間で違いがあることがむしろ一般的であるものと考えたい。つまり屈折形式より前に位置する日本語のような言語では、それが表す事態はその言語の話者にとって客観的な事態であり、

3) やはり『語学研究所論集』第 16 号の特集《モダリティ》のデータおよび別の号に掲載されたモダリティ特集についての補遺のデータなどによる。

したがってモダリティとしての性格は弱い。一方、トルコ語のように屈折形式（もしくはその後ろに続く形式）であれば、その言語の話者にとって、それは話者による事態に対する一種の判断を示すものと捉えられており、モダリティとしての性格は強いものとする。このようにモダリティの範囲は言語によって相対的に異なるものであると考える。したがって Narrog (2009) のように「事実であるか否か」を「モダリティ」の判断基準とし、日本語のモダリティを分析したのは正しいやり方であるとは考えない。したがって本稿では「義務と可能がモダリティに含まれるか否か」という点については、「言語によって異なっていることの方がむしろ一般的である」という仮説を提案する。

現時点で筆者は拘束的・動的モダリティと認識的モダリティの連続について、さらには拘束的・動的モダリティがモダリティであるという状況について、地域的に偏りがあるのではないかと、もしくは他の類型の特徴との内的関連性があるのではないかと考えている。ただこの問題を解明するためには世界の他の諸地域における他の言語との対照、他の類型の特徴との関連をさらに丁寧にみていく必要がある。

4. 3. 本稿で扱った言語における「ナル」相当動詞の使用範囲について

本稿の意味領域地図に出現した「ナル」相当動詞の数を見ると、日本語 2、トルコ語 0、モンゴル語 6、ナーナイ語 0、朝鮮語 5 であり、モンゴル語と朝鮮語において「ナル」相当動詞の「モダリティ」への文法化が顕著であることがわかる。ただしモンゴル周辺のシベリア・中央アジアのチュルク諸語にまで視野を広げると、特に許可、禁止、ついでは推量などの形式に「ナル」相当動詞の使用が観察される⁴⁾。

現時点で筆者はモダリティにおける「ナル」相当動詞の使用を、モンゴルを中心としたこの地域の地域特徴ではないかと考えている。ただしこの問題の解明にも世界の他の諸地域における他の言語との対照が必要である。少なくともシンハラ語の義務の形式に「ナル」相当動詞の文法化があることについては先にみた守屋 (2018) に指摘されていたとおりである。

4. 4. 本稿で扱った言語におけるモダリティと否定との関連について

はっきりと補充法的な形式が観察されたのはトルコ語と朝鮮語の可能の否定の部分、およびナーナイ語の禁止の部分である。可能に関しては一般に不可能の方が使用頻度が高いとされている。一つにはこの使用頻度の問題が両言語で可能の形式が非対称になっている原因であると考えられよう。

通常の否定形式が使われてはいるものの、日本語・トルコ語・モンゴル語・朝鮮語における不必要では許可の形式が否定されるのではなく、その前の事態の方が否定される形になっていることに注意したい。つまりここでも許可の形式は動詞複合体の後ろ寄りに位置することを示しているわけで、本稿の観点からはよりモダリティ的である、ということになる。

4) 同じく『語学研究所論集』第 16 号の特集《モダリティ》のデータおよび別の号に掲載されたモダリティ特集についての補遺のデータによる。

おわりに

本稿を通じて提示した結論は下記のとおりである。

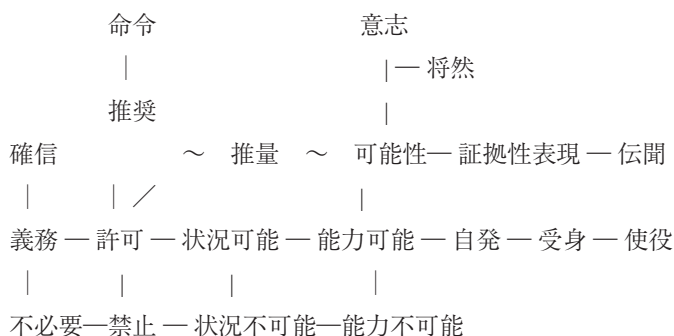
①表3のようなモダリティの意味領域地図を提案し、本稿が対象としたアルタイ型言語におけるその妥当性を検証した。

②拘束的・動的モダリティと認識的モダリティはトルコ語や朝鮮語では同じ形式が用いられ、連続しているといえるが、モンゴル語やナナイ語、日本語では連続していない。拘束的・動的モダリティの形式は、日本語では動詞複合体において屈折形式の前に現れる。このことからこうした言語では義務や可能はモダリティの範囲に入らないものと考ええる。このような言語は他にも多く存在する可能性がある。

③「ナル」相当動詞のモダリティへの文法化はモンゴル語（6つ）や朝鮮語（5つ）に多く観察され、日本語（2つ）はこれらの言語に比べると相対的に少なく、トルコ語とナナイ語には観察されなかった。

以下では今後の課題について触れておく。

ハルハ・モンゴル語以外のモンゴル諸語やナナイ語以外のツングース諸語についての検討が喫緊の課題である。意味領域地図自体は、証拠性やヴォイス的なものも考察の範囲に含めれば、さらに下記のような図に展開する可能性も考えられる。



すなわち、結局この研究は動詞の文法カテゴリー全体の研究に展開する可能性があるということになる。他方、「ナル」相当動詞の軽動詞的・コピュラの用法についてのアルタイ型言語における対照研究も今後の課題のひとつである。

参考文献

- Anderson, G. D. S. (2006) *Auxiliary verb constructions*. Oxford Studies in Typology and Linguistic Theory. New York: OUP.
- Auwera, J. van der and V. A. Plungian (1998) Modality's semantic map. *Linguistic Typology* 2: 79–124.
- Bybee, J., R. Perkins and W. Pagliuca (1994) *The evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: University of Chicago Press.

- Comrie, B. (1998) Attributive Clauses in Asian Languages: Towards an Areal Typology. W. Boeder et al. eds. *Sprach in Raum und Zeit, In Memoriam Johannes Bechert*, Band 2, 19-37. Tübingen: Gunter Narr.
- 林徹 (1989) 「トルクメン語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第2巻』 1379-1383. 東京: 三省堂
- 林徹 (2013) 『トルコ語文法ハンドブック』 東京: 白水社
- 伊藤英人 (2011) 「データ: 「モダリティ」 朝鮮語」 『語学研究所論集』 16: 134-148.
- ジンガン (2011) 「データ: 「モダリティ」 モンゴル語」 『語学研究所論集』 16: 149-157
- 菅野裕臣・早川嘉春・志部昭平・浜田耕作・松原孝俊・野間秀樹・塩田今日子・伊藤英人 (共編) (1989) 『コスモス朝和辞典』 東京: 白水社
- 風間伸次郎 (2011) 「データ: 「モダリティ」 ナーナイ語」 『語学研究所論集』 16: 57-74.
- 風間伸次郎 (2014) 「日本語の類型について — 「アルタイ型言語」 の解明を目指して —」 北海道大学大学院文学研究科 北方言語ネットワーク (編) 『北方言語研究』 4: 157-171.
- 風間伸次郎 (2016) 「地域的・類型論的観点からみた無生物主語について」 北海道大学大学院文学研究科 北方言語ネットワーク (編) 『北方言語研究』 6: 81-110.
- 風間伸次郎 (2019) 「アルタイ諸言語の場所表現における名詞的性格について」 『北方言語研究』 9: 41-65.
- 風間伸次郎 (2020) 「アルタイ型言語の語順特性およびそれと内的関連性を持つ諸特徴について」 『北方言語研究』 10: 17-40.
- 松田美香 (2009) 「20 「食べきらん・食べられん・食べれん」 はどう違う? 「～できる」 にもいろいろ」 九州方言研究会 (編) 『これが九州方言の底力!』 96-99. 東京: 大修館書店
- 守屋三千代 (代表) ・Tekmen, AyseNur・金智賢 (2017a) 「ワークショップ「日本語話者が見た『ナル表現』」」 『日本認知言語学会全国大会論文集』 16: 587-592.
- 守屋三千代 (2017b) 「ユーラシアの『ナル表現』 から日本語の『ナル表現』 を再考する」 『日本認知言語学会全国大会論文集』 17: 598-603.
- 守屋美千代 (2018) 「事態の主観的把握と「ナル」表現 — 認知類型論の観点より —」 『日本語日本文学』 28: 27-38.
- Narrog, H. (2009) *Modality in Japanese: The Layered Structure of the Clause and Hierarchies of Functional Categories* Studies in Language Companion Series 109. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (編) (2001) 『日本国語大辞典』 東京: 小学館
- 岡田和行・向井晋一 (2006) [2016改訂] 「東外大言語モジュール: モンゴル語文法モジュール (禁止・許可の表現 [解説], 可能・不可能の表現 [解説])」
<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/gmod/courses/c02/lesson04/step1/explanation/030.html>
(2020年11月11日最終閲覧)
- Onenko, S. N. (1980) *Nanajsko-russkij slovar'*. Moskva: Russkij jazyk.
- 小沢重男 (1983) 『現代モンゴル語辞典』 東京: 大学書林
- Palmer, F. R. (2001) *Mood and modality*. [2nd edition] Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, Randolph et al. (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London/New York: Longman.
- 渋谷勝己 (2006) 「第2章 可能・自発」 『シリーズ方言学2 方言の文法』 47-92. 東京: 岩波書店
- 庄垣内正弘 (1992) 「ヤクート語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第4巻』 544-550. 東京: 三省堂
- 菅原睦 (2011) 「データ: 「モダリティ」 トルコ語」 『語学研究所論集』 16: 193-202.
- 竹内和夫 (1989) 『トルコ語辞典』 東京: 大学書林
- 田中セツ子 (2005) 『現代モンゴル語口語辞典』 東京: 大学書林